

平成28年12月2日(金)

「久留米自慢」

久留米支部 C-35 奥田 幸爾

ずいぶん遅くなりましたが、去る9月10日(土)に松尾専務理事をお迎えして開催された、久留米支部の本年2回目の総会・懇親会で発表した「久留米自慢」についてご報告します。

ベートーベンの交響曲第九番は、「第九」としてよく知られ、年末によく演奏されていることは皆さんご承知のことでしょう。この「第九」が日本で初めて演奏されたのは、四国の徳島であることも比較的よく知られていることです。大正7年6月に徳島のドイツ人捕虜収容所で、ドイツ人捕虜による演奏が、日本初ひいてはアジアでの初演奏とされています。

しかし、少し調べてみると、徳島のドイツ人捕虜収容所での演奏は、ドイツ人捕虜が収容されているドイツ人捕虜たちに聴かせるために演奏したもので、日本人は看守とか収容所関係者のごく限られた人たちしか聴いていません。

では、一般の日本人が初めて「第九」の演奏に接したのはどこかとなりますが、それがここ久留米なんです。当時の久留米高等女学校、現在の県立明善高等学校(現在は男女共学)です。進学校で久留米では最も入りにくい県立高校です。本日の会場のブリヂストンクラブのすぐ裏にある高校です。

大正8年12月3日の「第九」演奏会当日、捕虜たちは、道案内の先導役一人の後を歩いて捕虜収容所から会場まで来たそうです。逃亡を防止する看守などは、いなかっということです。

聴衆は、女学生、教職員、父兄、近所の人たちだったそうです。

校長は、お礼に差し上げるものがないので、といって女学生の薙刀(ナギナタ)の模範演技を披露したそうです。

当時我が国は、各地とも捕虜たちを友好的に扱っていたようです。また、当時ドイツは先進国であり、日本はまだ技術的に遅れていたため、各地ともドイツ人捕虜に技術的指導をしてもらっていたようですが、久留米でも少なくともゴム会社2社が指導を受けています。

現在のアサヒコーポレーション(当時は日本足袋)、ムーンスター(当時は、つちや足袋)ともに履物メーカーは、ドイツ人捕虜の指導を受けています。

「ゴム配合法」という著書もあるゴム技術者の森 鉄之助氏は、ゴム技術雑誌によく我が国のゴム技術黎明期のことを書いていましたが、同氏は久留米の日本足袋(その後日本ゴムになり、現在のアサヒコーポレーション。なお、同社のタイヤ部が昭和6年に独立して、ブリヂストンタイヤ(株)となり、現在は世界一のゴム会社の(株)ブリヂストンになっています。)に勤めていたこともあり、ドイツ人捕虜のヒルシュベルガー氏のことを書いていました。ヒルさんと呼ばれていたようです。第一次世界大戦終了後と思いますが、日本足袋社はヒルさんの奥さんを久留米に呼び、ヒルさん夫妻は一緒に暮らしていたようです。と言いますのは、私は昭和35年に日本ゴムに就職し、37年に埼玉工場に転勤しましたので、久留米は2年間でしたが、その間の社内の同窓会——デルタ会と称していましたが、当時の顔触れは、専務、常務、工場長、各部長、各課長と、今から見るとすごいものでした。——のときに、当時の常務が専務に「ヒルさんの奥さんが久留米は立派な街になった。昔はものすごい田舎だったのに。と言っていた。」と、話されていたのを小耳にはさんだ記

憶があるからです。ヒルさんは、この時はもう亡くなっていたようです。

ヒルさんが技術指導したのは、大正末期と考えられますが、同社はそれから30数年経ってからも昔の恩義を忘れず、夫人を日本に招いたようです。

なお、ヒルさんはドイツに帰ってから、ロミカというゴム履物メーカーに就職され、これが縁でロミカ社と日本ゴムとは、ブランド提携していました。

又、当時の広島工業会の久留米支部の懇親会は、ブリヂストンタイヤの常務、工場長、各部長、各課長、各係長も出席され、ものすごい顔ぶれでした。広島高等工業、広島高専の出身者は、日本ゴム、ブリヂストンタイヤに多大の貢献をされています。現在の久留米支部には、ブリヂストン関係者はゼロですが。

応化では、第2回卒業の石丸 忠勇氏(日本ゴム、ブリヂストンで活躍後、日米ゴム設立)、第4回卒業の富安 武雄氏(日本ゴム専務)、昭和6年卒の岡井 武雄氏(九州ゴム機材設立)等ゴム関係が多かったようですが、醗酵科関係も今より多かったように思います。地域的にも、佐賀県や大分県からも参加されていたように思います。何しろ古い話ですし、自身が応化卒で、ゴム屋ですから、応化とかゴム関係は覚えています。そのほかは記憶がはっきりしていません。

入社当時、日曜日の朝など独身寮の近くをブラブラしていると、近所の年寄りがよく昔話をしてくれましたが、ブリヂストンがタイヤを作り始めたころの話してくれました。

毎日毎日タイヤの返品を馬車が(トラックではありません。馬車です。その年寄りも、馬車ぐるまと言っていました。)山のように運んできた。それはそれはものすごい量だった。タイヤはそのうちつぶれると思っていたが、つぶれなかった。地下足袋のもうけはすごかったんだねー、と言っていました。

その地下足袋ですが、試作した地下足袋の実履試験は、大牟田の炭鉱で実施して、改良を重ねていったそうです。

当時は労働用履物はなく、炭鉱夫たちは毎朝腰に草鞋(ワラジ)を何足も荒縄で巻き付けて、坑内に入ったということです。尖った石などがいっぱい坑内で、よく草鞋で重労働の作業が続けられたものだと感心します。

地下足袋が完成すると、労働用履物がなかった当時は、今では考えられないくらい売れに売れたそうです。地下足袋のもうけをつぎ込んでタイヤの開発をしたのだと聞いています。

地下足袋には、通常目にする底が黒くて厚い地下足袋の他に、軽装地下とって底が飴ゴム(透明感のある飴色のゴム……ゴム屋はクレープと言っていました。輪ゴムの色です。)で、厚みが薄いものがあります。主として鳶職など高いところに上がって仕事をする人が履くものです。

何年前かにTVで見たのですが、日本の鳶職は優秀なことで、海外でもよく知られているそうですが、TVに出た若い鳶職は、軽装地下がなかったら、我々とびは怖くて高いところには上がれません、と言っていました。又、親指が自由に動くのがいいのだとも言っていました。

相当以前に、TVのスポーツ番組で見たのですが、足の親指が自由に動くことがいかに重要かということをやっていました。柔道の選手に親指が自由に動く普通の足袋を履かせたと、親指が別になっていない足袋(靴下ではなく、親指が分かれていない特注の足袋)を履か

せた者とで試合をさせていました。親指が分かれていない特注の足袋を履いた方の選手は、親指が別になっていないと、柔道はできないと言っていました。その番組は、足の親指が自由に動くことがいかに重要かということの説明していましたので、日本には外国にはない地下足袋、特に軽装地下が昔からあり、スポーツ靴メーカーも何社かあるので、そのうち世界初の親指が別になっているスポーツ靴を日本のスポーツ靴メーカーが開発するものと期待していましたが、いまだに出てきません。

軽装地下の伝統があっても、スポーツ靴の開発となればよほど難しいのか、それとも海外の会社が何か目新しいことをやれば、ワァーと飛びつくが、自分からはやらないという古い体質がまだ残っているのか。私には、後者のような気がしてならない。

第九から始まって、ドイツ人捕虜、技術指導、ゴム会社、地下足袋、タイヤと連想するまにいろいろ書きましたが、久留米支部の一番の特徴である、『総会・懇親会を年2回実施し、内1回は会費不要、しかも会費要の回の会費も僅か5,000円！！』という離れ業が実施できるのも、実はブリヂストン社のお陰なんです。

ブリヂストンの厚生施設であるブリヂストンクラブは、一般市民にも開放されており、久留米支部は何十年も前から利用させてもらっています。料理も良くて、会場費を含めて格安です。このお陰で繰越金を長年ためて、軍資金にしたわけです。実は、軍資金がたまった要因がもう一つありまして、それは支部長が醗酵科の出身で毎回、純米大吟醸等の極上の酒を無料で提供して戴いているからです。これはもう永年、支部長就任以前から続いていることで、久留米支部会員一同、持つべきものは醗酵科の先輩かなど、感謝しつつ恩恵に浴しています。

この年2回実施、内1回は会費不要の快挙は、平成23年春の回からで、今年の秋で連続6年続いています。当初はこんなに長く続くとは、考えていませんでした。せいぜい4,5年ぐらいと見込み、軍資金が底をついたら終了と宣言していました。それがこんなに続いたのは、会費不要の回に置いた余金箱(預金をもじったもので、金の余っている人は、ご協力願います、という募金箱。……結構入っています。会が盛り上がったとき程、多く入っているので、一緒のバロメーター)の効果や予期せぬ臨時収入があったからと、ン万円寄付してくださる先輩がおられる他、最近では2回目の総会・懇親会には、一人1,000円の補助金が本部から出ることになりましたことのお陰です。ありがたいことで、当分続きそうです。

「久留米自慢」がいつのまにか、「久留米支部自慢」になりましたので、この辺で止めます。

以 上

あとがき

久留米支部総会・懇親会で発表した「久留米自慢」に、後半かなり加筆しました。